

西奈良中央病院

緩和ケア病棟 活躍する女性看護師

西奈良中央病院(奈良市鶴舞西町、松本宗明理事長)は、平成24年の移転に合わせ、緩和ケア病棟(24床)を市内初、県内では2番目に新設。県内で積極的に、地域のニーズに応えた医療を進めると同時に、現場で働く人々のワークライフバランスに早くから対応している。同病院の方針とともに、緩和ケア病棟で終末期医療に携わって活躍する女性看護師に話を聞いた。

緩和ケアの看護とは。痛を和らげるための治療
市川 緩和ケア病棟は、をすることを。そのため、
みどりの場という印象が、緩和ケア病棟の看護師と
強いです。本来緩和ケアとしては、患者さんが、残さ
とは、さまざまな症状・苦れた時間を自分らしく生

きるための場を提供する
ことが仕事だと考えてい
ます。
吉崎 患者さんが自分
らしく居られる環境のた
めに重要なのが、家族との
時間を増やすこと。家族と
過ごす時間を持ってもら
うことで、家には居ないけ
れども、病棟で同じだけの
安心感を持ってもらえる
よう、私たちができる最大
限の環境を提供します。

西岡 私たちの目指す
緩和ケアのあり方とは、患
者さんとご家族の身体的
社会的、精神的、スピリチ
ユアルの4つの苦痛をで
きるだけ取り除くことに
あります。患者さんだけで
なく、家族のケアも非常に
重要となります。
1-4つの苦痛(全人的苦
痛)を取り除くには、
西岡 患者さんのちょ
っとした変化を、表情や雰
囲気から読み取る目配り
が大事です。痛みを我慢し
てしまう方もいるので、小
さな変化に気付けるよう
常にアンテナを張り、時に
は言葉の裏を読む必要が
あります。
市川 面談などでも医

師と患者さんの一対一で
は気付けない変化を、看護
師が付き添って変化を認
み取ることで、患者さんや
ご家族の不安を解消でき
るよう心がけます。
吉崎 また、看護師だけ
でなく、リハビリを行った
理学療法士や散歩に同行
した臨床心理士から細か
い情報を得て、カンファレ
ンスで共有することも重
要です。情報を共有してお
くことで、小さな変化も敏
感に感じ取ることができ
ます。

お話を聞くことができます。
西岡 しかし、逆に勉強
になることが多いです。
そうした身近なお話をき
っかけに、気軽に話してい
ただけるようになり、ご家
族の声を聞き取りやすくな
ります。
市川 看護師は女性が多い
職種。女性が働きやすい環
境も整っているのは、
市川 子育てしながら
働いている職員も多いので、
重要だと感じます。

育休や産休、夜勤免除や保
育所などの支援は非常に
充実しています。できるだ
け各職員の要望に応える
よう配慮し、かつ全体との
バランスが取れるように
工夫して、皆が働きやすい
環境を整えています。
患者さんに安心して充
実した治療を受けていた
だかためにも、接する職員
が充実して働ける環境が
重要だと感じます。

「チーム医療」対応で 医療の質大幅向上

松本宗明理事長

消化器外科を専門とし、末期がん患者の治療にも多く携わってきた松本理事長。常々、「最期を迎える患者さんの苦痛をもっと和らげることができないか」と考えていたという。

鶴舞の地に移転する以前、奈良県には緩和ケア病棟が不足していた。がんが再発し終末期を迎える患者も外科病棟で診るしかなく、認定看護師を中心とした緩和ケアチームはあったものの、痛みや苦痛を充分に和らげるケアができる環境がなかった。「末期がんの患者を受け入れられる環境を整え、地域の人々の苦痛を地域の病院で和らげたい」という思いを実現するため、緩和ケア病棟を新設した。

「緩和ケアは『チーム医療』そのものである。医師、看護師、臨床心理士、薬剤師、理学療法士、栄養士、ソーシャルワーカーなど、さまざまな専門職のスタッフが、患者さんと家族を中心とした『輪』で、治療に取り組む姿勢が大事」と強調する。



(前列右から)吉崎主任、市川師長、西岡看護師と松本理事長(後列左)ら緩和ケア病棟を支える医師、看護師

市川 里重さん(38)

吉崎 愛子さん(36)

西岡 幸実さん(30)

自分らしく生きる場提供

情報の共有で変化敏感に

家族のケアも非常に重要



病室は家族も泊まれるようソファベッドも完備



患者や家族の交流の場・テイルーム

プロとして看護師は言動に責任を

山中信子看護部長



「プロとしての看護師は何より自分の言動に責任を持つ」と語る山中看護部長。「課された責任を果たすとともに、独自の看護観をきちんと持ち、そのために努力できる存在でなくてはならない」と強調する。
県内の(看護協会)に加入している(看護師)は93%が女性。男性も徐々に増えつつはいるが、まだまだ少ないという。
「現在は、女性が多く活躍している看護の場であるが、これからは、一般的によく言われる、論理的な考え方のできる男性と、気配り目配りに敏感な女性が協力してこそ、男女の良い特徴を生かした、患者さん中心の看護が実施できると思う」と、男女がともに活躍できる看護現場の充実を願う。

創刊117年 記念特集 女性が変わる奈良